

放生門
龍
落葉
龍
國柄

第^二人 教^二生^一の

御^二敷^一とある^二此^一君^二乃^一く^二四^一方^二を^一

移^二る^一を^二れ^一 和^二是^一の^二鹿^一鳴^二け^一社^二職^一

は^二ち^一の^二何^一某^二に^一我^二も^一也^二相^一を^二こ^一乃

が^二都^一より^二洛^一陽^二乃^一寺^二社^一跡^二を^一尋^二ね^一

四^二つ^一と^二ふ^一と^二日^一を^二南^一祭^二乃^一由^二所^一同^二

つ^二藩^一より^二あ^一る^二申^一さ^二る^一や^二と^一な^二作^一る^二事^一

都代山乃胡
 其幡山伏見乃里も遠く
 羽代細道うむるく渡乃つこ
 くもつちもあや祢ま所
 坊に急りけり
 急の程
 是のちやハ幡乃里の急てハ心静
 社とあつた
 急の程

乃びけりともあつて
 秋露水 山松のほこも
 神めつるも 名を
 人を教へ吾を賞し 悪をりて平
 ども 御代にたれあり
 ゆくふきむら 萬徳をねざら
 いまの東に かきむら 積善

ちねふ海に限りある魚はま
 あり教生れふ不審より人
 字に河ふ雷の山なり梅をみ河
 神をみ行ふとあらうありきと
 甲 こそは是る嘉國より始りて
 上へふねよまきりてとあら
 しく此河神のたけ教生會と
 申すなり

申すなり ありきとあら
 ちねふ海に限りある魚はま
 あり教生れふ不審より人
 字に河ふ雷の山なり梅をみ河
 神をみ行ふとあらうありきと
 甲 こそは是る嘉國より始りて
 上へふねよまきりてとあら
 しく此河神のたけ教生會と
 申すなり

おとさのきりし魚のりき我とて
 所々おとさの鋼ふもきぬ神たつ
 をあつたり今ありあはれ事
 うれおとさの放いのりき御謂
 けりそ異國退治の御時
 くみ敵とてほ給ひしきき
 吾根のその為に放生れ所をた

小
 川
 元

一
 謂をきけりも軽なりと
 多を放つるのりき御謂

神皇正統記
 御説久武の河の水を濁も神

くれ
 石清の

水
 神

水
 神

水
 神

ふさふさ木と花もあそび風なみ
空の細きうき^{ヤラ}峯の山うき^{ヤラ}そめ
ほろ里神樂^{シラ}りくまの心多きあお色
きいそ神さびく月もあふる清
水^{ミヅ}を^{ヤラ}けうめ^{ヤラ}揺る^{ヤラ}れ^{ヤラ}空あるさかぬ
物^{モノ}の^{ヤラ}け^{ヤラ}う^{ヤラ}魚^{イサ}泳^{イサ}ちう^{イサ}と^{イサ}人^{ヒト}よく
り^リほ^リそ^リつ^リと^リゆ^リつ^リて^リの^リ神^リの^リ告^リや

方^{カタ}程^{カタ}や^{カタ}代^ヤも^ヤほ^ヤつ^ヤ古^コも^コ音^ネ
入^イ蔵^{ザウ}の^イ書^イ取^イと^イま^イう^イち^イう^イ神^{カミ}
と^ト清^{キヨ}き^{キヨ}け^{キヨ}う^{キヨ}武^ブ氏^シの^ブち^ブの^ブれ^ブ
ち^チう^チと^チち^チ葉^{エフ}を^{エフ}あ^{エフ}つ^{エフ}男^{オウ}山^{サン}の^{オウ}な^{オウ}
ま^マう^マつ^マて^マ山^{サン}の^マり^マく^マつ^マき^マう^マ
早^{ハヤ}あ^{ハヤ}た^{ハヤ}照^{テウ}を^{テウ}代^ヤこ^ヤう^ヤつ^ヤぬ^ヌ男^{オウ}山^{サン}の^{オウ}あ^{オウ}く^{オウ}
ま^マな^マう^マり^マ月^{ツキ}影^{カゲ}の^{ツキ}さ^{ツキ}や^{ツキ}う^{ツキ}た^{ツキ}出^デて^デる^デま^マ

文三

ふり風乃多に松方くいたるむき
乃拍子そ秋多ぬ目みさる
心も秋内樂と舞ふ日
毛移る雪の夜ハくまの神を
ひらつ柵百敷乃蘇る反大宮
人々あすちあらねども死
地引所より花の冠をかきこやう

女三

あつたもまらうほくふくをま
めらやりのけとあつた言葉
乃知も時をえく其めうわさ
うく鬼も神も初まう和声の道
ううてうまれ

服

甲子

和まううのちうてくうのぬ
後うてうよ 是の西國方う
出う僧う 我の部さうん

多う 都みう洛陽見とさう山
やう心うう海客出うてくうハ
重うま路うてくうとまうてう

後

目へふじられ梅と申る^{コキ} 意なり
や旅のしめとふつづのばうを名をみ
ていそ^{シテ}つち名を預り事のけり
づもつうにふあうたる異名なり
^{コキ}うしつちるも名付るも是なり
もまの如き人^{シテ} 村は生田森
る平家十萬の金持の地なり

はげぬふ梶原平義景時同し
源を景まさるも梅を有と
一枚つづの服さす此に則て
やあうての意ありつちる
高名人はまの景季のつて
いれと禮^{フセ}し則ち八幡の神を
よむ^カ以て公將乃古のた

半上虎

天地を人
 ぞ見る雨
 山を震動
 海もあり
 雷火もつれ
 雲内を
 紅煙乃旗
 火をくく
 燭字に
 火をくく
 山に海に
 皆何なる
 なるも
 成ぬ
 なるも

海をくく
 火をくく
 山に海に
 皆何なる
 なるも
 成ぬ
 なるも

[illegible]

落葉

和
あまの草
ふり
れ
く
枝
や
日
一
か
る
花
ん
早
は
一
可
不
住
の
僧

あまの草
ふり
れ
く
枝
や
日
一
か
る
花
ん
早
は
一
可
不
住
の
僧
あまの草
ふり
れ
く
枝
や
日
一
か
る
花
ん
早
は
一
可
不
住
の
僧
あまの草
ふり
れ
く
枝
や
日
一
か
る
花
ん
早
は
一
可
不
住
の
僧

行^二新^一と^二入^一も秋^二夢^一で^二時^一雨^二と^一く
 日^二救^一撫^二て^一都^二も^一し^二つ^一て^二清^一芽^二生^一
 乃^二小^一野^二貴^一山^二路^一も^二空^一は^二多^一り^二く^一
 実^二く^一け^二可^一は^二古^一小^二野^一乃^二后^一と^二止^一
 人^二初^一遊^二ま^一り^二て^一弦^二向^一時^二宇^一治^二貴^一
 里^二ち^一く^二字^一舟^二と^一ち^二に^一行^二あ^一ひ^二い^一と
 あ^二ひ^一て^二佳^一あり^二ま^一る^二が^一井^二町^一ち^二く^一ハ^二手^一

上巻

習^二乃^一志^二と^一う^二や^一ト^二き^一と^二あ^一り^二い^一と
 一^二や^一さ^二き^一や^二と^一あ^二き^一は^二力^一あ^二れ^一た
 或^二路^一貴^二末^一乃^二ち^一る^二あ^一き^二い^一が^二お^一山
 家^二は^一ま^二あ^一り^二と^一よ^二成^一仏^二得^一脱^二路^一も
 給^二へ^一な^二り^一て^二い^一ち^二成^一市^二僧^一手^二習^一乃^二
 君^二の^一と^二あ^一り^二い^一ひ^二い^一と^二さ^一ん^二は^一
 可^二う^一と^二思^一ひ^二出^一て^二る^一ま^二り^一は^二跡^一と^二局^一

落葉

二

尸山^{シテ}うさうさお月あつうう
 ちよあまの宮あはれさび可あ
 てるわと何て^甲向う^乙ふらう^丙其
 伝^丁通^戊り^己る^庚そ^辛実^壬く^癸あまの宮
 乃^子事^丑も^寅あ^卯ぬ^辰る^巳梅^午く^未は^申旧^酉跡^戌の
 い^亥つ^子れ^丑程^寅う^卯找^辰あ^巳か^午う^未入^申せ
 多^酉と^戌そ^亥行^子山^丑陰^寅の^卯そ^辰の^巳流^午る^未石^申岩^酉
^{ヤラ}

根^一ま^二り^三る^四事^五し^六行^七道^八の^九実^十と^{十一}落^{十二}葉^{十三}の^{十四}う
 つ^一り^二き^三て^四跡^五の^六の^七こ^八も^九さ^十海^{十一}邊^{十二}に^{十三}う
 ち^一あ^二お^三手^四も^五か^六れ^七し^八さ^九雲^十風^{十一}と^{十二}く
 ぎ^一ん^二ち^三や^四首^五の^六下^七ま^八き^九う^十古^{十一}宮^{十二}の^{十三}さ^{十四}い
 し^一き^二あ^三ま^四色^五し^六と^七も^八あ^九り^十ま^{十一}り
 美^一ま^二り^三山^四の^五秋^六の^七そ^八ら^九る^十奥^{十一}山^{十二}
 み^一ね^二あ^三踏^四か^五鳴^六塵^七の^八声^九を^十伝^{十一}て^{十二}う^{十三}る^{十四}

うり東より西へ秋一村のたへる
 山ふりてさきそ都より雲の八重
 山と詠りきん横川の峯より人
 実西白や名前さくらなを興つ
 子細道と分ける行はま者うへて
 煙のつらさうねるは人々
 みるあゝ頃松もさあゝ

上清、まゝう海よ薪よりや夕暮はうく
 ぶあききききき煙のむらさき
 お我の魚ひききききききききき
 ありて宮我ありてきききききき
 けりちりききききききききき
 小野我きききききききききき
 さきき古ききききききききき

月やむしよかきく
 急ぎひの深き夜やぬる
 雲桂の枝よ鳴きつらきつら
 下ろけあるげぬきつらきつら
 加よ上ぬきつらきつら
 ぬきつらきつら
 ぬきつらきつら
 ぬきつらきつら

へおる中くあきや落葉の霜貴
 づるあきや落葉の霜貴
 夕霧れ海山きつらきつら
 の道よりへまきつらきつら
 下ろけあるげぬきつら
 下ろけあるげぬきつら
 下ろけあるげぬきつら
 下ろけあるげぬきつら

砲台報

甲寅

是の丸列松浦に付果しては休了

きのり石けりひみ開の清次と戸毛地

御老いふと口論ふ金又敵とハ討

作去る科人のりう同着者さ

きく放去大岡のりうとアガ番れ

事あつて対するやふぬらうに知る

方

平

フカレ

フカシ
△
長丁にい
う

軍

子

新

あ

方

臣

カレ

四

冬

三

外

罕

子

大

子

三と掛く時と守一事もなりてらん
 下丸
 とさうておき奇よ時よりけうらま
 トトニラ
 を教をきけしはよありぬる返
 十
 くてもそくも君うなむすてそ
 病
 おひ教と撞て心う慰きたるあふ
 同ろりある根も撞て慰め人
 板式色し音よく
 あく響の

青い山は行 湘浦乃うや城皇女英
 凍靴古むといつ ころもあや
 西の山あふきいけ乃きもゆつくあ
 乃被う子よあめ靴の偏りめ契るよ
 あり書眼をみじの離きつはふあやと
 是きひのやさうくさふや登ハ

る
月
井
籠

班

此上の張りも

知見のきまを尋ねて技を早く
 出へて安んずるを以て。此の
 きょうもあつて。此の書は。前
 宰府より。今も。あつて。あ
 る。いふ。も。隠す。申。た。り。ま
 した。年。の。就。親。の。十。二。年。よ。う。な。り。あ。つ。て。

早ニもたぎ舟ニ和ニ松浦の川ニ西ニ
彼國ニ極樂ニ極樂ニ極樂ニ極樂ニ
ふ咎をたぎれあちわいの荒有る
乃所並態やウ極ニ時目とくす
かく新書と尋ねつどもあへ
ゆりめく結契りめを清久よ松浦の
門や二世縁き有る心ゆく

國栖

早ニ思ニ人ニ雲井と山ニ雲ニ夜乃
月ニ都ニ名ニ石ニ跡ニ月ニ早ニ
月ニ山ニ山ニ山ニ山ニ山ニ山ニ
頼め神月やいもてなま
夢あふぎもろ乃御流き清見
魚の天皇にやあ海と立君と

申に御ゆるりて、天津を渡り
とくまの御子御伯父大伴のま
子もそり給日都乃りつるを
遠田告ぬるまの山野をあるま
露落り道乃果まぐも行幸と
おろへ頼もやうまを秋山や
乃中れ字多乃たるまの金前

上あ
男廉少ひさるまの春日山

三差をまりるま雨た多の
そ吉野の熟もまの
ま春日あつるま雲井より人
にだのまをりるまにこく

早河

はえ程まらつるまの山中は雲

はるまの河を渡るまのうす

あまのまききぬ 御よりほひあ
清見念乃天子といふを思ひ
あまの釣棹をりしを
いふ成御事をかほしやまは
戸の志しきまのあまの
今もいふあまの世のあまの
うまはまの世のあまの社
あまの

清見念乃天子といふを思ひ
あまの釣棹をりしを
いふ成御事をかほしやまは
戸の志しきまのあまの
今もいふあまの世のあまの
うまはまの世のあまの社
あまの

四

方印

倭、御乃残りも尉あつたにこと
わく作 ^{ニテ} 荒者もやぶる

うらなへて給うまゝおろく作

^早そを打なして給ふはさるゝと申

ゆゑみそ ^{ニテ} 打なして給うまゝと申

社國撫うと云ふまゝと申

祖母倭御れ残りも尉あつたにこと

御さうと申すは魚いふこと

みそ ^{ニテ} 打なして給うまゝと申

まゝと申すは魚いふこと

まゝと申すは ^{ニテ} 筋の事お宣

ひそがみそいふことと申す

まゝと申すは ^{ニテ} 打なして給うまゝと申

そを打なして給ふはさるゝと申

ひそが

すまの死より人れ名もあつてけし
の都率の内院もまた人^{の上}も
五言のやうにもいふていふ
こゝろも^{ニテ}書ける事ある
野山がくちのやうな山あり
くまのくちの山あり
上へ行くは舟ありやうも
きほと舟ありやうも

さうも^{ニカ}穢所^{ニテ}のやうな
りきり^{ニカ}のやうな
同一事あるがやうな
さうも^{ニカ}のやうな
ふ城根籍といふていふ
度もあつてさうな

あの根籍人を打受りくヒキなま

ふもせ遠平れ武士の海りたる

^{シテ}今ちうりうと祖父うもるヒキうら

やうりうとえらやヒキえい

^青舟りうと玉祥れくヒキうら

きたる舟りうと命だヒキと

る舟りうとヒキうら君を

舟りうと水りうと船りうと

忠勤りうとヒキうらヒキうら

安ら下人りうとヒキうら

やうりうとヒキうら

^早君十善れ母もヒキうら

りうとヒキうら

りうとヒキうら

光
天
保
十
一
年
庚
子
歲
孟
春
改
正
再
板

右之本者觀世太夫織部
以章句真本今亦新令改
版者也

寬政十一巳未歲弥生

天保十一庚子歲孟春改正再板

皇都二條通御幸町西入町

山本長兵衛



